



コトづくりの認知と知の統合に向けて

会誌編集委員会 委員長 原辰次*



横断型基幹科学技術研究団体連合（横幹連合）の設立の趣旨は、ホームページで以下のように述べられている。文理にまたがる43（現在は44）の学会が、自然科学とならぶ技術の基礎である「基幹科学」の発展と振興をめざして大同団結したもので、限りなくタテに細分化されつつある科学技術の現実の姿に対して、「横」の軸の重要性を訴えそれを強化するためのさまざまな活動を行う。

私も設立前の準備段階から横幹連合の活動に関わってきたが、その活動の難しさの一つは“わかりにくさ”にあった（現在も払拭されてはいないが）。「横断型基幹科学技術とは何か？」という定義に始まって、「具体的な成果として何が期待できるのか？」という問いに明確な答えを用意することが非常に困難であった。木村英紀副会長を中心として、様々な議論が繰返し行われ、ある程度収斂するものの万人が納得するものに至るのは難しかった。以下、それに関する経緯の主要部分を振り返りながら会誌「横幹」の役割と編集方針を述べることにする。

横幹科学技術に対する私なりの当初の理解は、具体的な製品も背景となる業界も持たない分野横断的領域で、幅広い多くの分野に適用可能な普遍的な方法論の確立を目指す学問領域、というものであった。その後、木村副会長が「モノとコト」の対比という視点を提唱され、「コト」をキャッチフレーズとした展開が有効のように思えてきた。すなわち「モノ：対象」を中心としたいわゆる縦型研究領域と直交する「コト：機能」を中心とした分野横断的な学問領域とが、車の両輪のごとく調和を持って発展することが科学技術の進展に必要不可欠であるという認識に立ち、それを推進していくのが横幹連合の活動である、という主張である。

しかし、「コト：機能」といってもやはり抽象的であり、この言葉からは具体的な成果は見えてこない。横幹連合の活動の重要性を世の中に認知してもらうためには、会員学会が団結し、具体的な見える形のイベントを開催する必要に迫られた。そこで、平成17年11月に第1回横幹連合コンファレンスが長野で開催された。通常の学会と異なり横断的視点に立った発表・討論が自然になさ

れ有意義であった、という多くの声が聞かれた。また、その機会を利用して「コトづくり長野宣言」(p.35を参照)もなされ、大成功であったといえる。

さらに、知の統合を目指した「総合シンポジウム」、「知の統合ワークショップ」や横幹技術協議会との共催の「横幹技術フォーラム」、「技術シンポジウム」など多くのイベントが開催され、それなりの成果を上げてきている。しかし、これらはどちらかという一過性のもので、横幹の活動を根付かせるためにはアーカイブとして後世に受け継がれるものの作成が必要との認識となった。これが横幹連合の学会誌「横幹」の誕生の経緯である。

新しい会誌「横幹」を発刊するに当たって、既存の学会誌（横幹連合の会員学会の会誌を含む）との違いを明確にする必要がある。そこで、論説・解説・サーベイ論文・原著論文の4つのカテゴリーを設定し、すべての記事を以下の2点に焦点を当てて評価することとした。

- ・横断的視点に立った考察・論理展開
- ・知の統合に向けた概念・方法論の提案

「論説」は横幹の視点からの科学技術論の展開、「解説」は横幹に関連する学問分野における具体的な活動を通じたコトづくり・知の統合の推進に向けた報告と提案、がそれらの主たる範疇である。一方「サーベイ論文」は知の統合のキーとなり得る概念や方法論を分野横断的な立場で整理したもの、「原著論文」はコトづくりに関するオリジナルな考察や知の統合に向けた新しい概念・枠組み・方法論の提案、が対象である。

横幹に関連する分野は文理にまたがり幅広い。そのため、価値から体裁まで多様性を認めざるをえない。狭い領域での多様性の許容はレベルの低下を招きかねないが、横幹という非常に広い土俵での多様性は上記の2点の軸を押さえておくことによりレベルの向上に繋がると信じている。一つ一つの会員学会という横の糸が、本会誌「横幹」という場を通じて、横幹という太い幹に育っていくことを願っている。さらには、「横幹」が縦型領域を含むこれからの科学技術を牽引する知の宝庫となり、コトづくり宣言の3項目が実現することを夢見ている。

年2号でスタートするが、需要に応じて発刊頻度を上げていく予定である。皆さんからの積極的な投稿をお待ちしております。

*横幹連合理事・東京大学